

「金融教育を考える」第6回小論文コンクール
優 秀 賞

地産地消にこだわる
(株)「HIRAJIMA 海の幸・
山の幸プロジェクト」の実践から
～金銭・金融教育のさらなる可能性を希求して～

徳島県・阿南市立平島小学校 尾川 弘美

知るぽると
www.shiruporuto.jp

1 はじめに

近年我が国の食事情は、基幹産業である農業の衰退と共に自給率が40%を割り込み、第1次産業の就労者は減少の一途をたどっている。児童たちの食生活の乱れや健康上の課題も指摘され、よりよい食習慣の形成が一層求められるようになってきた。そこで総合的な学習の履歴を最大限に活用しながら、地産地消の食育としての「作物」と「金銭・金融教育」を学びの両輪に据え、学習過程の各ステージで児童に選択や判断の機会を数多く設けることによって自己決定力を育て、本物の「生きる力」の基盤を醸成しようと考えた。本実践は、平島小学校4年生での1年間にわたる取り組みの記録である。

2 研究の仮説

地域に密着した農業や漁業の生産物を販売することで培われる健全な経済感覚と達成感は、児童の自己肯定感を高めることができるのではないだろうか。

3 研究の方向

- お金の価値と力にふれ、将来のよりよい生活者としての資質を身につける。
- 学校での学びを児童が発信し、家庭とも連携を深めるような学習としていく。

4 実践の歩み（資料1、2）

(1) モノの値段の仕組み・・・日本の食事情を概観した値上がりの意味と背景を学ぶ

金銭・金融教育の柱を、地元の作物を育て販売するという体験的な学びに置こうと考えた。そこで5月。児童たちの経済や生活の実感を掘り起こすために、授業の導入に最近値上がりを感じる品物の一覧をワークシートに自由に書かせ、要因別に分類検討した。値上がりの筆頭はガソリンであり、次に小麦を主原料とした食品群が続き、大豆などの穀物も高騰していた。そこで、ガソリンの値上がりがなぜ起こったかということ調べるなかで、ガソリンと食料品の値上がりとが無関係ではないこともわかってきた。飼料作物が代替燃料の原料に充てられた影響で、食糧の不足と高騰が起きていたのである。このように、モノの値段というものは、単に日本国内の需要と供給のみによって成立しているのではないことも確認でき、経済活動のグローバル化が広がっていることを理解した。

そこで児童たちが、この学習で販売する商品が農作物になることも想定し、自分たちの食卓がどれだけの輸入品によって支えられているかという視点で専門家から話を伺い、改めて地元の生産物による地産地消の大切さについて確認することを考えた。

(2) 農政事務所の方をお招きして・・・地産地消の食材の大切さと意義

来校前に入念な打ち合わせを行い、問題意識の共通理解を図った。当日は日本における食料の海外依存度の高さと、遠隔地から食料を運ぶことが環境に与える負荷の大きさ＝食料マイレージ、金銭的な価値以上に安全の大切さについて深く理解することができた。折しも、毒入り餃子や産地偽装報道が新聞の紙面を賑わせていた頃である。

(3) 道の駅リニューアル・・・劇的!! 町おこし事業への参加と販売への事前学習

本校区には、県南の交通拠点としての道の駅がある。しかし、近年の消費不況と競合店の進出が脅威となり、年々売り上げを落としていた。そんな折、道の駅の担当者よりリニューアルへの提案を求められた。授業で依頼状を読み上げると、児童たちから歓声があがり、それを意気に感じて、施設を盛り上げるためのさまざまなプランを描き始めた。自然と立地条件や品揃え、値段、新鮮さ、駐車場、掲示や案内などの各指標ごとに近隣店とのアドバンテージが比較検討され、予算（道の駅の消耗品の予算の一部＝4,000円）を基に飾りつけの計画が始まった。予算規模から企画は淘汰されながら、自然と絞り込まれていった。

この学習を通して、児童たちは自分が販売の主体になったときに何が必要かということも同時に学ぶことができた。リニューアルは複数回実施され、第1回は七夕の前に。道の駅では、それに合わせて冷凍庫やジュースの陳列位置までも変更する大がかりな改装となった。地域の活性化に直接関与しているという充実感と有用感が、

児童たちを突き動かしていた。第2回は10月、地域の名所を手書きで紹介し、第3回目には、壁一面のクリスマスカードが年末の来館者を出迎えることとなった。1月には新春の書き初め展示が行われ、季節感を演出する工夫もなされた。この学習の話し合いでは、徐々に情緒的な意見は淘汰され、具体的な指標から内容を検討し決定することや費用対効果を考えることが習慣化されていったし、この活動は起業に向けての大切な助走となっていった。こうして、着々と「海の幸・山の幸プロジェクト」が始動する準備が整っていった。

(4) 「山の幸プロジェクト」・・・地産地消にこだわる作物の選定と意外な栽培法から

本校には学校園も学校田もない。あるのはわずかばかりの花壇であり、毎年のように台風による大きな被害を被っていた。そこで、1) 日常の生活場面で継続的に世話と観察ができ、2) 栽培が比較的容易で、3) 輸入食材との違いを実感でき、4) 収穫したものが換金（販売）でき、5) 学習に発展性があるという条件を満たす作物を探すことになった。そしてたどり着いたのがシイタケである。それならば、畑も田んぼもいらぬ。そこで、現在主流となりつつある菌床ブロックでの栽培に取り組むこととなった。徳島県は菌床シイタケの生産で全国1位であり、まさに地元の食材であった。農家の方にゼロから教わることとなったが、初めて訪れた初夏の日、目にとびこんできたのは断熱鋼板に覆われたハウス群であった。聞けば、冷暖房と換気までがコンピュータ管理だという。不安もあったが、シイタケ菌がブロックに行き渡る期間を待って、本格的な栽培に乗り出すことになった。

まず、設置費用を抑えることを考え、夏の工事（本校は、夏休みに大規模な耐震工事が実施された）で出る廃材を活用し、教室に隣接した研修室に栽培棚を製作した。菌床ブロックの数を100個と想定。研修室の広さから作業空間を割り出し、強度から支持する骨材の間隔も考えた。児童の身長から作業効率も考慮し、棚は縦＝4m・横＝2m・高さ＝70cmに決まった。毎日の観察のため、デジタル温・湿度計も壁面に設置し、10月上旬には、空気中の雑菌に慣らすための保護キャップをとったうえで栽培が始まった。何しろコンクリート校舎の2階である。成功には、温度と湿度の管理が鍵を握っていた。そこで、シイタケの販売についてどのような形態で販売するかということについても、急ぎ話し合いがもたれた。シイタケの収穫量は日変化が大きいことも予想されたので、委託販売ではなく、自分たちが毎日取れたてのものを出荷できる校門付近の無人販売に落ち着いた。しかし、シイタケがその質において販売に堪えうるものかということが見えてこなかったため、申込用チラシを全校児童（約400名）に配布し、予約販売で反応を見ることになった。

それに並行して、市場調査も進められた。スーパーや小売店をまわり、「品質」や「価格」「包装」「店頭陳列」「鮮度」「量」「大きさ」「値段」の情報を収集し、産地や栽培法も条件に加えて丹念に調べた。児童からは、「中国産のシイタケは安いけど買う人は（安全面から）選ばないので参考にしない」「大きいのと小さいのかが混じるから、サイズで分けての出荷はできない」「100gの販売では、使いにくいから200gを1袋にしたほうがいい」「無人販売では、ある時とない時があって迷惑をかける」「菌床ブロックの費用を回収できるだろうか」などと、価格を巡って激論が交わされた。結局100g＝100円と200g＝300円との2案に絞られたが、200g＝300円で販売し、添付のアンケートの反応で、高ければ変更しようということに落ち着いた。栽培したシイタケがどんな評価を受けるのかという不安を抱きながらも、販売に向けてのチラシの写真撮影やラベル・請求書・領収書なども作成し「Xday」に備えた。目の前の課題をひとつひとつ解決し、修正しながらフィードバックさせる……その動きは、まさにPDCAサイクルを地で行っていた。

初期発生以後、シイタケの成長は芳しくはなかったが予約注文が殺到し、発売2日目で120名待ちになってしまった。当然、無人販売も中止。楽しみにしていた調理もできなくなってしまった。それでも、児童たちは班ごとに1日3回の菌床への霧吹きと床そうじ、温度・湿度の記録を続け、農家の方にも手紙で助言を求めた。

11月中旬にやっと多数の芽が確認でき、収穫→計量→袋詰め→配達→集金という一連の仕事の流れも手慣れたものになってきた。配っても配っても減らない注文に、いつしか自分たちの商品が高く評価されていることを実感すると同時に、驚くべきは他の学年の教室に入る時のマニュアルまでも考える児童が生まれた。会計係の児童は、早速学校近くの金融機関に会社名義の預金口座を作った。栽培には温度管理に不安があったが、室内という利点を最大限に生かし、寒い時期は新聞紙の日よけを天井から垂らし日陰を作りながら気温を上げるという低コストな方法で乗り切ることができた。菌床を復活させるために水に浸ける作業を工夫したことで、プロジェクトは越年し、6か月にわたり収穫を続けることができた。コンクリート校舎2階という場違いな設定が珍しいのか、新聞・テレビなど各方面の話題となり、学校の情報発信にもつながった。シイタケは3月中旬までに50kgを超える収穫があり、販売額は6万円を突破したことを会計の担当者から報告され、笑顔の児童たちであった。

(5) 「海の幸プロジェクト」・・・ワカメ養殖＝平島小学校が切り拓いた地産地消のバイオニア事業

第2の柱は、ワカメ養殖である。漁協とタイアップした出島海岸での事業は、県内の産地偽装事件もあり、漁協を挙げて取り組む一大産地へと育っていた。11月上旬には、鳴門の水産研究所の職員と漁協組合員の2名をお迎えし、ワカメの生態と養殖の苦労話を伺うことができた。種付けを経て、冬休みの課題には販売時の折り込みチラシ(2,000枚)のデザインを考えることとし、1月中旬には400kgを超えるワカメを収穫、道の駅で販売することになった。児童たちは、東北地方で始まったインターネットでの生ワカメ販売の情報なども分析し、チラシ紙面のレイアウトやキャラクターなどを話し合い、週間天気予報を確認しながら万全の準備で販売日を迎えた。販売を知らせるポスターの掲示場所の選定にも力が入っていた。

販売当日は、収穫したワカメ1,500袋以上が3時間ほどで完売し、会社には13万円以上の利益が生まれた。寒風の中、声をからし販売した商品は、お互いの信頼の絆までも強めるものに育っていた。店長を中心にした5か所の店は、すべて道の駅の動線を遮断するように配置され、自然と来客全員に声をかけられるようになっていたし、児童手書きのワカメ料理のレシピ(資料2-Ⅲ-1)も大きな訴求効果があった。この学習は4年目を迎えるが、収穫時のノウハウも確立され、地域からも注目されるイベントに育ちつつある。

(6) 18万円という利益からの夢・・・利益の使途から金銭についての品格を育てる

2月中旬、会計担当の児童たちから売上金の発表がなされ、販売益を支出する学習が進められることになった。役員会での原案を基に、全員で売上金の使い道を選択していった。先輩たちの伝統を受け継いだ1)市社会福祉協議会への車いす寄贈、2)お世話になった方を招いての感謝の会、3)他学年へのクッキーのプレゼント、4)中庭へのアルミのベンチ設置などを順当に選択した。児童たちは1年間の学びの中で自分たちらしさも表現してくれた。それを述べたい。

(ア) 車いすのA先生と交流するための学年遠足を実施・・・バリアフリーの確認に

4年生は人権の学習で障害者差別のことを深く学び、車いすのA先生から多くのことを教えていただいていた。同時に、まだまだ社会で改善しなければならないことがあることも知った。A先生とどこかへ行きたいという気持ちが湧くようになったのも自然のことである。しかし、貸し切りバスでは予算が足りない。そこで、駅に近い学校の特長を生かし、JRでの遠足を企画した。小学生の団体往復割引を使い、昼食は給食のパン納入業者と交渉して、全員が揚げパン1個という昼ご飯を選択した。そこに迷いはなかった。A先生と行きたかったのである。みんなで車いすを押して汽車に乗って……。目的地の博物館での昼食で、飽食に慣れきっている児童たちが、たった1個のパンをいとおしむように食べている風景は、どんな学習にも及ばないような崇高な価値が内包されていたし、食べ物のおおしむ大切さとお金の価値を同時に再認識することにもつながった。

(イ) 子どもたちのつづやきから生まれたもの・・・サプライズとしての児童給付金

この「海の幸・山の幸プロジェクト」は、予想を超えた収益を上げ、お金が自分たちのなしとげたいことを実現できる大きな力の源泉であるということ、十分に確かめることができた。しかし、大切なことに気づかされたのは放課後のある児童の一言からだった。「家の方でお金のやりくりが大変なので、学習雑誌も自分のおこづかいで買っている」と言うのである。学校という閉ざされた空間で鈍感だったのは教師自身であり、頭を殴られた気がした。初めて、会社運営に担当が介入することになった。別紙のようなアンケート(資料2-Ⅲ-2)を配り、児童たちからの給付金としての500円について、親子で話し合ってもらおうと考えた。直後、保護者から続々と反響が寄せられた(原文のまま、一部抜粋)。

アンケート1 500円で、子どもさんとどんな話をされましたか。

- ・自分も学生時代に、初めてアルバイトをして、欲しかった服やレコードを買った話をし、今は当然のように欲しいものを親から買って貰って当たり前のように思っているが、その為にお金を稼ぐのは決して簡単でないという話し合いをしました。
- ・500円というと娘の1か月のおこづかいと同じ金額で、多いようで少ないという微妙な金額とも受け取れますが、今回いただいた500円はちょっと違います。さまざまな方のご指導、お陰のもと、子ども自身も会社の一員となって、労働をして質のいいワカメやシイタケをたくさんの方に買っていただけて生まれた利益であり、娘にとって初のお給料であり、価値ある500円だと親子で楽しく話し合いました。
- ・500円で何を買えるのか？ 子どもには多くは買えないけれど、決して少なくない金額です。いろいろと考えていました。おこづかいではない特別なお金らしく、使い方への注文が多かったです。

アンケート2 この500円をどう使う（予定でもいい）ことになりそうですか。

- みんなハンバーグが好きなので、ミンチ肉を買って、お姉ちゃんがハンバーグを作ってくれました。おいしかった。
- 道の駅で200円を足して、桃の木を植えた。毎年この時期に花が咲くと4年生を思い出すと思います。

アンケート3 今年度の4年生の学習や今回のことへの感想をお願いします。

- ワカメにしてもシイタケにしても生き物を相手に育てることや収穫・袋詰め・宣伝・接客、お金の学習……さまざまな労働の元を学習させていただき、子どもたちのやる気と努力もあって多くの利益を生み、給料（配当金）もいただき理想的な社会勉強をさせていただけた。
- 金銭金融教育を通して、金銭勉強だけでなく自分たちで考えて意見をまとめて話し合っ、実行するという生きた社会勉強ができたのではないかと感じます。それと同時に1年間という長いスパンで同じことを発展させながら学べることはすばらしいと思います。（中略）子どもには提案する力・考える力が楽しく身についたと思います。今回の4年生の学習は社会へ出たとき役に立つと思いました。国語・算数・理科・社会の勉強も必要だけど、このような今回の学習は学校でないとできない学習なので本当に良かったと思います。このような学習を一年一年続けていけば立派な社会人になれるのではと思います。1年間すばらしい学習をしていただいたことに感謝しております。

上記のような意見が出され、学習の価値とねらいにおいている教師の思いが、どの家庭でも児童および保護者に共有されていたことを実感することができた。

5 仮説の検証と反省

.....

本校では、年度末に学校生活全般について保護者による評価を行っている。項目は多岐に及ぶが、4年生児童の学校での楽しさや自己肯定感を示す項目は際だって高い数値を示し、保護者の意識調査でもほぼ同じ傾向を示した。この起業による学びは自己肯定感の醸成という目的だけでなく、他教科・領域にも学習意欲の向上という副産物を生みながら波及していった気がする。本来お金というものは手だてであり、方法を選択するための力であるが、保護者一人一人と担任の気持ちが高まっていると実感できたことは素直にうれしい。

反面、実務面では経験不足による反省が大きい。シイタケの予約販売では、大量の注文に混乱したり、誤配や責任の所在がわからなくなったりすることもあった。集金できたのかの確認も十分でなく、数量の不足やB級品の混入という品質面の課題が露わとなった。

また、児童たちが主体の会社運営では最後の教師の介入については賛否が分かれることになるだろう。悩んだ末の介入だったが、そこには、会社の主体的な運営と教師が知らせたいお金の究極の価値とのせめぎ合いが確実に存在した。

6 おわりに

.....

1年を振り返り感じることは、金銭・金融教育の無限の可能性である。単に食育の「作物」を知識としてだけとらえるなら、児童たちにあれほどの参加意識は育たないだろう。自らが考え生み出すという揺るぎのない体験が集団を徐々に変貌させていった。起業においては一人一人の「競争」と「協働」が、学習全体の活性化への鍵を握っているように思える。これからも、児童の目線に立った学びを続けていきたい。いつまでも。

資料1 食に関わる金銭・金融教育の全体計画とその足どり

経済活動理解編
ファーストステージ

【テーマ】 最近値上がりしたものを身近な生活の中で見つけ、そのわけを突き止めよう。

学習活動 ものの値段とそれを決める背景について考える。

徳島農政事務所職員の方々

★ガソリンの値上がりがなぜ起きているのかをたどる中で、それが食料問題と密接につながっていることや世界の経済活動も地球規模でつながっていること、食での地産地消や安全の大切さについて学ぶ。どんなことよりも安全が最優先されるということの理解。

経済活動理解編
セカンドステージ

【テーマ】 那賀川道の駅をリニューアルさせるために自分たちでどんなことができるかを立地、品揃え、値段、新鮮さ、駐車場、掲示、鮮度、競合店の情報等から考える。

学習活動 地元の道の駅を再生し復活させるためのよりよいアクションを考える。

道の駅の職員の方々

★道の駅の置かれている状況分析とどう変えていくかという変身プランの作成
★機器や棚のレイアウトの変更、新商品の導入 ★季節感を生かした年4回の飾り付けの実施

GT (ゲストティーチャー)

GT

鳴門水産試験場 加藤さん
中島漁協組合員 武田さん

サンマッシュシユ榔瀨協同組合

児童出資による HIRAJIMA 海の幸・山の幸プロジェクトの事業展開

海の幸プロジェクト

【テーマ】 先輩が開拓したワカメ養殖を、自分たちで種付けし、収穫と販売を体験しよう。

学習活動

他府県ワカメの価格を調査し、道の駅で直接販売するために、ポスターやチラシ作りやおすすめのレシピなどを自作する。また、来客の動線を予想しながら場所決めをし、ポスターの訴求効果についても検討する。直接販売の利点とリスクについてまとめる。

山の幸プロジェクト

【テーマ】 徳島県の特産物である菌床シイタケを栽培し、それを販売しよう。

学習活動

田んぼも畑もない学校の実態から、鉄筋校舎2階の研修室で菌床シイタケの栽培を行い、予約販売をする。事前に価格調査を行い、配達時のマニュアルを完成させながら、日々の霧吹き・床そうじ・気温・湿度調査を「引き継ぎノート」にまとめる。

a

学校他学年・GTへの感謝のために

- 中庭へアルミのベンチ2脚を寄贈する。
- オリジナルケーキを発注し、感謝の会を開催する。
- 菓子をプレゼントする。

b

自分たちの夢の実現のために

- 車いすのA先生との校外学習の汽车代を支出する。
- 校外学習での全員の昼ご飯＝揚げパン代に支出する。

c

がんばった自分たちのために

- 200円の出資に対して100円の配当金を得る。
- 家族全員への給付金として500円を得る。

d

地域をよくするために

- 来館した方に見てもらうために、電波時計の寄贈をする。

e

世の中に役立てるために

- 骨髄バンクへ寄付を行う。
- 市の社会福祉協議会へ車いす2台を寄付する。

f

友情の絆を深めるために

- 交流していた盲学校のBくんへ、世界で一枚だけの全員で歌ったCD送付。

養われたもの ●物を大切にする心 ●勤労に感謝する心 ●お金への正しい知識と態度

身についたと考えられる「生きる力」とは

- 1) 会社の中で一人一人が個性を発揮しながら、コミュニケーションを図り働くことができた。
- 2) 学ぶことと働くことの役割や意義・多様性を深く理解することができた。
- 3) 先生から、言われるのではなく、自分たちがその場その場でよりよい選択と決定ができるようになった。
- 4) 学習活動全般を通して、多くの人に支えられたことを理解し、感謝する素直な気持ちが生まれた。
- 5) お金の持つ力とその大切さについて、実体験を重ねる中で心と体に刻まれた。

資料2 「HIRAJIMA 海の幸・山の幸プロジェクト」の歩み I 写真集



学年研修室での栽培棚作り
建設廃材で棚を作り菌床を置く。



順調な生育
11月のある日の収穫量。児童たちの、1日3回の霧吹きや室温のコントロール、シイタケノート引き継ぎが効果的になってきた。



シイタケの発生風景
シイタケの成長はグラフで表示していく。初期発生は大ぶりなものが多い。



霧吹きで水分補給
菌床は乾燥が苦手。



菌床ブロックの吸水作業
2度の収穫の山を経て収穫が減ってきたことで、水分を補給する。浮力が強いためにコンクリートブロックをのせて、10時間ぐらいそのままにしておく。この頃、菌床は大きさ重さとも一回り小さくなり、児童たちもその変化を感じ取っていた。予約注文で待っている人が多いので、折るような気持ちである。10月～3月まで収穫をしたが、役目を終えた菌床は、肥料として活用され、環境に優しいこともわかった。



朝の収穫風景
真剣な表情で重さを量る。



ワカメ養殖導入の授業風景

鳴門の水産試験場の研究員から、ワカメの生態や栄養、成長の過程などのお話を伺う。質問は事前にファックスで。



ワカメ発生のサンプル

神奈川県猿島沖の芽胞体。ワカメの基がこんなものであることに児童はびっくり。



ワカメの種付け

たこ糸につけた5ミリほどのものをロープにさし込んでいく。



ワカメの養殖海面



起業した会社の出資金を金融機関に

会社の会計が全員の出資金を預けている様子。児童の一部には、「振り込み詐欺に遭わないように」と声をかける者もいて、児童たちの金融犯罪の知識にも感心させられることとなった。



中島漁港での体験学習

ロープへの種付けの作業を全員で行う。中島漁協の全面的な協力で成り立っている学習。



会社の総会の様子

成功するのも失敗するのも自己責任、自然と話し合いも熱を帯びてくる。司会を含め、真剣な表情が他の教科領域のレベルを超えている。



出島海岸でのワカメの収穫風景

このあとのワカメをトラックで移送、児童玄関前で分別し袋詰め。



道の駅のワカメ販売風景

動線を遮断している。



感謝の会の様子

今年もオリジナルケーキをデザインし、食べていただく。



車いすの寄贈

今までの先輩の伝統を受け継いで販売益を地域に還元する。



ワカメの袋詰め風景



学年遠足の汽車の中で

車いすの先生といっしょにどこかへ行きたいという児童たちの願いが形になる。子どもの団体往復割引を活用し、昼食は全員揚げパン1個。夢をかなえるためにお金が使われた。



道の駅への電波時計の寄贈

いろいろお世話になり、またリニューアルでもがんばった道の駅に電波時計を寄贈する。スタートはこの場所からだった金融教育。

資料2 「HIRAJIMA 海の幸・山の幸プロジェクト」の歩み II 新聞報道

徳島新聞記事 2008年5月30日付

阿南 平島小児童が食糧事情学ぶ

徳島農政事務所が出前授業



阿南市の平島小学校で二十九日、徳島農政事務所職員の出前授業があり、四年生七十六人が耳を傾けた。

食糧担当の四人が、最近の食品の値上がりについて説明。日本は食料の多くを海外に頼っており、輸入先の価格変動に国内の価格が左右される上、石油の高騰で国内の作物も栽培や流通費が増えていると述べた。

熱心にメモを取っていた勝瀬華穂さん(八)は「値上がりは仕方ないけど、輸入に頼りすぎると何かあったときに食糧が足りなくなりそうって怖い」と話していた。

朝日新聞記事 2008年7月4日付

児童が改装大作戦

阿南の道の駅 8周年祝い七夕飾り



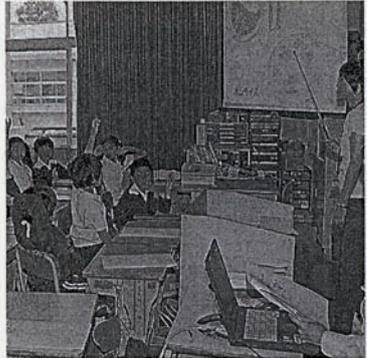
阿南市那賀川町の「道の駅 阿南市那賀川」が8月に開館8周年を迎えるのを祝って3日、地元の平島小学校4年生76人がリニューアル大作戦を展開した。駅物産館に七夕飾り5本と那賀川の人気者たちアゴヒゲアザラシ「ナカちゃん」の特大パネル5枚などを飾り付け、掃除もした。きれいになった館内で「七夕」を歌った写真。再活性化を願って夏バージョンに衣替えし、久保田虎成君(9)は「僕たちの大作戦を見て、多くの人が来店して欲しい」と話した。同駅は登下校時の緊急避難先にもなっている。

朝日新聞記事 2008年7月5日付

総合学習で「食」

専門家が 出前授業

阿南の平島小



阿南市立平島小学校の4年生76人が、今年度の総合的な学習で日本の「食」の現状を学んでいる。食料の多くを輸入に頼っているため、穀物や石油価格の高騰に国内価格が影響されやすいことなどを、農政事務所やメーカーの出前授業「写真」などで勉強しており、学習成果を年度末までに発表する。

5月は、徳島農政事務所の高騰で国内作物の栽培・流通経費も増えているとする、値上りの背景を説明。6月は、メーカーの担当が栄養食品も高騰の影響を受けている状況を話した。児童は「輸入にはかなり頼っていると大変なことになる」「食料自給率を上げるには、地産地消の日本型食生活が大切なことを実感した」と、感想を述べた。今後は農家や商社の話を聞く予定だ。

徳島新聞記事 2008年7月4日付

ナカちゃん写真飾る

阿南の道の駅 七夕に向け平島小児童



阿南市の平島小学校の四年生七十六人が三日、道の駅・阿南市那賀川の物産館に、七夕のササアザラシのナカちゃんの写真飾り付けした写真。物産館中央の展示スペースに、来館者が短冊をひねられるように五本のササを立てた。ナカちゃんの写真は最も大きなもので縦九十センチ、横百一十五センチあり、五枚を飾った。七月末まで展示する。八月十日の開館八周年を前に、物産館が近くの平島小に飾り付けを頼んだ。井内修希さん(8)は「七夕らしくなってきた。ぜひ見に来てほしい」と話していた。

新聞記事は、各新聞社の許諾を得て転載しています。

徳島新聞記事 2008年11月6日付

「種ワカメ 阿南
大きく育て」阿
平島小児童が養殖
阿南市の平島小学校の
四年生七十八人が五日、
那賀川町上福井の出島海
岸でワカメ養殖を始め

た。総合学習の一環で、
昨年に続いての実施。来
年二月に収穫する。
近くの中島漁港で
漁協組合員から手ほどき
を受け、四本のロープ
（長さ二十メートル）に種ワカメ
を付けた糸を結んだ。口



ロープに種ワカメを
結ぶ児童—阿南市那
賀川町の中島漁港

いまま、ロープは海面近
く、水平方向に張つ
た。順調に育つ約四百
本のワカメが収穫でき
る。重りを
沈めてロー
プを固定し
た玉田恵次
君（七）は
「食べるの
が楽しみ。
大きく育つ
てほしい」と話した。

朝日新聞記事 2008年12月6日付

本物育て食の学習 教室でシイタケ栽培

阿南・平島小の4年生

阿南市那賀川町の平島小
校4年生児童78人が、コンク
リート建て校舎の2階教室隣
にある研修室で菌床シイタケ
を育てている。写真。今年度
から取り組んでいる食の学習
の実践活動で、12月に入って
1日平均十センチ以上を収穫で
きるようになった。校内で消

費するほか、校門前の無人
スタンド販売も計画してい
る。
外国産の食材を国内産と偽
って販売する事件が相次いで
いるため、「身近に世話でき
る安全な物を育ててみよう」と
いう声が児童から上がり、
菌床シイタケ栽培を5月から



始めた。室内を遮光カーテン
で閉め切り、1日3回の霧吹
きや水やりなどの世話を続け
てきた。

10月上旬から収穫できるよ
うになり、これまで約10万を
校内で自家消費した。その
後、来年1月ごろまでに50万
近くは取れる見通しになった
ため、校門前で200万、30
0万程度での無人販売を計
画。近くの中島漁港ではワカ
メも養殖しており、1月末に
は約400万を収穫できる見
通しだ。

毎日新聞記事 2008年12月13日付

クリスマスカードで
道の駅店内飾る
阿南・平島小児童
年末年始の帰省客ら
を華やかに迎えるよう
と、阿南市那賀川町工
地の道の駅「公方の郷
ながわ」で12日、市立
平島小の4年生が店内
に手作りのクリスマス
カードを飾り付けた。



店内にカードを張りつける児童ら—阿南市の道の駅
「公方の郷ながわ」で

10月は地域の多所案内
を掲示。今回は4年生
78人が図工の時間に製
作したクリスマスカー
ドを店内の壁に張りつ
けた。個性あふれるカ
ードが並べて掲示され
ると、店内はクリスマ
スマードいっぱい。
自宅からツリーを持
参した小松耕里さん
（10）は「きれいな光を
見てほしい」。佐々木
隆志君（10）は「生懸
命作りました」と張り
つけ作業に励んでいる。
【同知泰司】

朝日新聞記事 2008年12月16日付

クリスマス用に
道の駅飾り付け
阿南・平島小
クリスマスを前に、阿南市
那賀川町の平島小学校4年生
が近くの道の駅「公方の郷な
かがわ」をツリーやリースで
飾り付けた。総合的な学習で
取り組んでいる道の駅再活性
化を願った活動の一環。78人
全員が作った「道の駅にお客
さんがたくさん来て」「映画
館を作って」などの願い事
書いたクリスマスカードも通
路いっぱいに張りつけた。

徳島新聞記事 2009年1月24日付

平島小児童 体験収穫のワカメ



大きく育ったワカメを引き上げる子どもたち。阿南市那賀川町の出島海岸

阿南市の平島小学校四、五年生七十四人が二十三日、海岸でワカメの収穫を体験した。総合学習の一環で、二十四日同町の道の駅・公方の郷なかかわで販売する。

ワカメは昨年十一月、児童が種付けしたもので、この日は児童代表六人が中島漁協組合と一緒に漁船に乗り込み、約一・五時間に育ったワカメを海中から引き上げた。自分の身長よりも大きなワカメに、児童は歓声を上げた。勝瀬華穂さん(〇)は「二月までこんなに大きくなってびっくり。海の栄養がすごい」と目を輝かせていた。

児童は収穫後、ワカメを学校に持ち帰って選別。めかぶ、美葉に分け、三百円ずつ袋詰めし、一袋百円で販売する。

朝日新聞記事 2009年1月24日付

「多くの人においしく」

平島小 4年生 養殖したワカメ収穫



養殖していたワカメを収穫する平島小の児童ら。阿南市那賀川町の出島海岸

阿南市那賀川町の平島小学校4年生78人が23日、近隣の出島海岸で中島漁協の指導を受け、養殖していたワカメ約360kgを収穫した。漁船で校長、教頭らと昨年11月に口

1. 3本に種付けしていた場所まで2往復して引き揚げた。2. 1.5以上に育った見事なワカメに歓声を上げていた。収穫したワカメは学校まで運んで、ロープから刈り取り、水洗いして芽株と茎とワカメとに選別し、300g単位で袋詰めした。24日午前8時半から地元にある道の駅「公方の郷なかかわ」で、1袋100円で販売する。藤田もも夏さん(10)は「小さな種をこんなに大きくなった海の力にびっくりしました。たくさんの人においしく食べてもらいたい」と話していた。

徳島新聞記事 2009年3月6日付



食材販売の収益金で購入した車いすを贈る児童。阿南市社会福祉協議会

食材販売収益で 車いす2台贈る

平島小児童、阿南市社協に

阿南市の平島小学校四年生が五日、車いす二台を市社会福祉協議会に贈った。車いすは総合学習で栽培した食材の販売収益で購入しており、今年で四回目。四年生七十八人は、昨年から総合学習でワカメ約四百kgとシイタケ約四十kgを栽培して道の駅や学校で販売。収益約十七万円で車いす二台を購入した。児童代表四人と担任教

「阿南市の平島小学校四年生が五日、車いす二台を市社会福祉協議会に贈った。車いすは総合学習で栽培した食材の販売収益で購入しており、今年で四回目。四年生七十八人は、昨年から総合学習でワカメ約四百kgとシイタケ約四十kgを栽培して道の駅や学校で販売。収益約十七万円で車いす二台を購入した。児童代表四人と担任教

徳島新聞記事 2009年3月20日付



道の駅は、時計を物産として、児童の代表四人が届けた。館中央の情報ブースに掛ける。津山直紀君(〇)は「道の駅を訪れた人に喜んでもらえるように話していた。」

時計をプレゼントする児童。阿南市那賀川町の道の駅・公方の郷なかかわ

阿南市の平島小学校四年生が十九日、同市那賀川町の道の駅・公方の郷なかかわに電波時計をプレゼントした。時計は、七十八人の児童が総合学習でワカメ、シイタケを栽培し、販売して得た収益の一部四千円で購入した。ワカメの販売場所には道の駅の広場を提供してもらったお礼として、児童の代表四人が届けた。

資料2 「HIRAJIMA 海の幸・山の幸プロジェクト」の歩み III 学習資料

1. ワカメ・シイタケをテーマにしたケーキの提案事例

創意工夫を生かしながらも、250円まででというコスト意識は、金銭・金融教育で身につけた力を検証する場にもなる。販売してもらいたい理由の項目では、地産地消の意味についての記述が見られる。

<p>総合 スクープ 追跡 (ついせき)</p>	<p>ニュース度 ○○○○○○○○○○○ NO 4年 ■組 ■番 氏名 (■)</p>
<p>☆ ワカメかシイタケにちなんだ「ケーキ」を提案しよう。</p>	<p>命名 ワカメ シイタ ケーキ</p>
	<p>ケーキ作りのルール 平島小学校4年生が感謝のつどいに、パティシエの高市さんに、作っていただく参考になるように説明を入れてください。課題はショートケーキ。1個あたりの値段が200円～250円の範囲でできるもの。</p>
<p>ケーキの材料 (わかれば・・・) ○いちご(4) ○生クリーム(白・みどり)色 ○ケーキのスポンジ ○チョコクリーム</p>	<p>工夫したこと ケーキの上のぶぶんは、シイタケの上のぶぶんにしたところ。</p>
<p>○作り方の説明 (高市さんにわかりやすいように・・・書ければいい。) ○ケーキのスポンジをまんなかで、半分は切らして、みどり色の生クリームをついてサンドして、下全体に白の生クリームをつけて、上は、まんなかからへんに、白の生クリームをバツェン(X)のようにつけて、上のそのほかあいているぶぶんは、チョコクリームで、うめる。そして、バツェンのあいだ、4つに、いちごを1こずつあいだに、おいて、出来あがり!</p>	
<p>○なぜこれを販売して欲しいかという理由 (わけ) このケーキがあるのは、地いきのみねさんが、シイタケ・ワカメを買ってくれたおかげで、このケーキがありますよ。と伝えたい気もいっぱいこのケーキがほしいです。私たちがシイタケ・ワカメを売って、それを地いきのみねさんが、買ってくれたからこのケーキがある。つまり、地いきのみねさんがいなければ、このケーキはないんです。だから、これは、いっしょにx2人をつなげていますという気もいっぱい。</p>	<p>新発売の可能性 / 100点</p>

2. 金銭・金融教育のまとめアンケート

このアンケートは、唯一教師から児童たちへ提案の形で実施されたものである。しかし、直後から大きな反響と共に、児童と保護者が世代を超えて「お金」や「仕事」「アルバイト」「就職」などの話題で話し合うことができた価値ある時間も提供することにもなった。

4年生保護者の皆様へ

金銭金融教育のまとめアンケートのお願い

本年度は大変お世話になりました。おかげをもちまして、大きなお叱りもなく1年を終えることができますのも、すべて保護者の皆様のおかげと感謝しております。

さて、4年生の総合的な学習での「ワカメシイタケとれとれ会社」は、おかげをもちまして、無事に黒字決算で終わることができました。子どもたちは、力を合わせることのすばらしさと周りへの感謝の気持ちを感じてくれたのではないかと考えています。車椅子の寄贈や校外学習も実現できました。これもすべて多くの方々のお力添えのおかげです。シイタケもワカメも保護者や地域の方々に支持され、利益は10万円を超えました。

しかし・・・、世の中はアメリカのリーマンブラザーズの破綻をきっかけにした100年に一度の大不況の嵐のまただ中にあります。ふと、この利益を冷静に考えてみたとき、もちろん冷たい風の中をワカメ販売に働き、シイタケの毎日の水やりや世話を欠かさなかった中で生まれたものには違いないのですが、子どもたちの出資には50パーセントの配当金もあります。

そこで、最後に残りました利益の500円を一人一人に分配し、それぞれのご家庭でお使いいただこうと思います。そして、それについて親子で話し合いの時間を持っていただき、それを報告いただけないでしょうか。

お金の大切さやその苦勞についても話し合ってください、保護者の方の仕事のやりがいについて話し合うもよし、500円というお金についてじっくりと話し合うもよし、子どもが稼いだお金だから使えないと神棚にまつるとか、はたまた、サンマを買ってみんなで焼いて食べてもよし・・・いろいろとお金や仕事にまつわるお話をしてみてくださいませんか。そして、そのことをご報告いただけませんか。たかが500円、されど500円です。それが、金銭教育の大きなまとめとなると考えています。ご協力をよろしく願いたします。

- ※ ①アンケートをいっしょに出してもいいご家庭は、そのままお出しください。
- ②アンケートは、どうしても書きたくないという方は、受け取りだけを担任までお渡しした封筒に入れて、お返してください。

3. 保護者への会計報告書

この会計の郵送費の内訳には、今までにお世話になった方への生産物の送付代金も含まれている。平島小学校を大切に思ってくれる方には、きちんとその思いをお返りする・・・これは脈々と続くお金についての品格を基礎とした本校の金銭・金融教育の伝統である。

第4学年 保護者殿

「ワカメシイタケとれとれ会社」会計報告

1 収入の部	237,805円
ワカメ販売代金	154,600円
シイタケ販売代金	67,600円
出資金(200円×78人)	15,600円
預金利息	5円
2 支出の部	237,805円
【内訳】	
(1) 必要な経費とされるお金	
袋代・郵送費	17,497円
菌床代	20,000円
お世話になった方へ(額と用紙代)	4,086円
お世話になった方へのお礼	9,000円
感謝の会・紙皿代	5,992円
子どもたちがデザインしたケーキ	30,000円
(2) 地域や学校・他の学年の子どもたちのためになどに使われたお金	
車椅子(2台)	27,315円
寄贈(学校へのアルミ椅子 道の駅への電波時計)	21,580円
感謝の会の日に在校生へ(お菓子・チョコ等)	5,572円
(3) 自分たちの夢が実現されるためのお金	
校外学習のきな粉パン代	4,920円
校外学習自動車代(阿波中島～文化の森往復)	19,410円
(4) 自分たちが働いたことによって得られたお金	
出資金と配当金(200円+100円)×78人	23,400円
家族と話し合ってほしいお金(500円)×78人	39,000円
(5) 困っていたり苦しんでいる人たちに光を届けるためのお金	
骨髄バンクへの寄付	10,033円
3 差し引き残高	0円

以上の通りご報告いたします。
ご協力ありがとうございました。